

IX. 大陸浪人の地理哲学（1）

IX-1 場所を失った者たち

【戦国時代の終わり】

北山一揆（「北山^{いっき}意起之者十二月十一日ニ新宮^ニ大せいにてよせきたり……」『浅野家旧記』）

1614年、紀伊国と大和国にまたがる北山地方で、大坂冬の陣に呼応して起こった一揆。首謀者は「世ニ所謂五鬼」とされた山伏。鎮圧され、虐殺が発生。

- ・ 真田幸村が大坂に現れたとき、山伏の姿をしていたという（『武林雑話』）。
 - ・ 柳田国男は山伏を「乱世に適したもの」ともいつていた（「山立と山臥」）。
- 関ヶ原で負けた西軍の敗残兵が即座に消えるわけではもちろんない。歴史に居場所を与えられないとしても、山は依然として敗者の逃げ込む場所として、アジールでありえた。
- しかし、近世において、山は次第に石高制の世界に組み込まれていくことになる。もともと、「御林」の初出は関ヶ原ののち羽州に移された佐竹残党に備えて常陸に設定されたもの。逃げ場所は都市へ。

【近世の終わり】

Cf. 大杉栄「征服の事実」

征服だ！ 僕はこう叫んだ。社会は、少なくとも今日の人のいう社会は、征服に始まったのである。

カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスとは、その共著『共産党宣言』の始めにいつている。「由来一切社会の歴史は階級闘争の歴史である」と。けれどもこの階級闘争の以前に、またそれと同時に、種族の闘争があった。…古今を通じて、一切の社会には、必ずその両極に、征服者の階級と被征服者の階級とが控えている。

→ 戊辰戦争・西南戦争・自由民権運動・日清日露戦争・大逆事件……敗者は武士。彼らはどこに？

- ① ひとつの流れは文士。場所なしに、言葉そのものに成り代わって生きることを選ぶ（言文一致運動）。
- ② もうひとつの流れは、大陸浪人……。

■ 大陸浪人（アジア主義者）

大陸浪人、ないしアジア主義の研究は丸山真男・竹内好を嚆矢として展開。その淵源とされるのは征韓論の西郷隆盛。帝国主義やナショナリズム、軍国主義や日本ファシズムなど、戦後社会が認める悪名のほとんど背負って今日にいたっている。

IX-2 場所なきを生きる——独立正義から大陸へ

いづれにも荷^{かた}胆^{たん}仕候と申^{もうす}考も無^{ごぞなく}御座、衆^つ訴にも不^{つかず}付、落^ふ印にも無^な御座、独立正義と決心^{まかりあり}罷^ま在^り候……

「鶴田藩管内動揺一件書類」『備前備中美作百姓一揆史料』

■ 日本全国戸籍表（明治六年）

華士族・卒の人口は192万7848人、全人口3008万9401の6.4パーセントを占めていたとされる。このうち華族は2251名であり、華族に属することのできなかつた200万の武士たちがいる。

◎ 彼らはどこに消えたのだろうか？

実業家（志賀直温や岸田吟香）や農政家（新渡戸稲造）に。しかしそれがすべてではない。

【不在と実在のあいだ】

維新以来、とりわけ西南戦争や自由民権運動を経て、戦うことを生業とする武士たちは居場所を失っていく（戦うべき敵の不在）。

Cf. 北村透谷「人生に相渉るとは何の謂ぞ」1893年

吾人は記憶す、人間は戦ふ為に生れたるを。戦ふは戦ふ為に戦ふにあらずして、戦ふべきものがあるが故に戦ふものなるを。戦ふに剣を以てするあり、筆を以てするあり、戦ふ時は必らず敵を認めて戦ふなり、筆を以てすると剣を以てすると、戦ふに於ては相異なるどころなし……。

→ 古い自己規定を失って、孤独な前-存在者と化した武士。

→ 彼らはふたたび生成変化の力を得て、一部は《文士》に。またべつの一部は《大陸浪人》に。

→ ヒントとしての《武士論》。800年にわたって日本史の中心を占めてきた武士の精神性が維新によってただちに失われると考えることはできない。

IX-3 三つの武士論

■ 近世身分制社会

・前近代の封建的前提（暗い圧政のイメージ）は正しかったか？（近年の研究動向）

◎ 三谷博「明治維新には、目立った、『原因』らしい『原因』は見あたらない」（『明治維新を考える』2006）

◎ 身分制（士農工商）・鎖国等々の封建的要素に対する疑念。

・近世における「家」とはなにか？

◎ 分業体制を維持する職業学校。人格に家格が優先（というより、人格が家業とともに形成される）。

◎ 農業・狩猟（つくる・とる）、工業（取得物を加工する）、商業（加工したものを交換する）。この普遍的な人間の生産様式の上位に、これをコントロールするエリート（武士）を想定する身分制（『漢書』・『淮南子』）。したがって、武士はもっぱら学者である。

◎ 分業体制の外部からの需要にはどのようにして対応したのか。「二男三男」「人外」の存在。

・性欲のいびつな解放、恋愛の抑圧

「私ニ婚姻ヲ締ブ可カラザルノ事」（『武家諸法度』）

こころと恋に責められ、五十四歳までたはぶれし女、三千七百四十二人、少人のもてあそび七百二十五人、手日記にする。「井筒によりてうなるこ」より已来、腎水をかへもして、「さても命はある物か」。

「これぞ二度都へ帰るべくもしがたし。いざ途首の酒よ」と申せば、六人の者おどろき、「ここへもどらぬとは何国へ御供申し上ぐる事ぞ」といふ。「されば、浮世の遊君・白拍子・戯女見のこせし事もなし。我をはじめてこの男ども、こころに懸る山もなければ、これより女護の嶋にわたりて、抓みどりの女を見せん」といへば、いづれも欲び、「譬へば腎虚してそこの土となるべき事、たまたま一代男に生れての、それこそ願ひの道なれ」と、恋風にまかせ、伊豆の国より日和見すまし、天和二年神無月の末に行方しれずになりけり。

■ さまざまな武士論

① 武士＝農民論（原勝郎／柳田國男／石母田正）

江戸期の学者が、古は兵農一致と論じたのは有名なことであるが、人によってはこれを平時に武士が下人を指揮して、農業を営んでいたというだけに解して、武家も農家も古くは同一の団体の一分子であったというまでには思っておらぬものがあるかも知れぬ。しかしこれはそのような、中途半端なものではなくして、徹底的に武家すなわち農家であったことは疑いなき事実で、これがまた日本の社会のすこぶる誇るべき特色で、あるいは世の中が末になったごとく憤る人もある時勢に際して、吾々が将来の発展に対して、なおすくなくからざる希望を持つ根拠である。

柳田國男「家の話」

- ⊙ 周縁に住む農民から生まれた健全な鎌倉武士（坂東武者）のイメージ。（在地領主制論）
- ⊙ ナショナリズム。

② 武士＝官僚論（久米邦武／黒田俊雄／高橋昌明）

武の本体は公家社会にあり、そこで発達した弓馬の道を吸収することによって武門武士の武芸が生まれた……。

高橋昌明『武士の成立 武士像の創出』

- ⊙ 武士は職能集団。中央に住む貴族（伊勢平氏や河内源氏）から武士は生まれた。（権門体制論）
- ⊙ 国家主義。

③ 武士＝流民論（折口信夫／網野善彦）

山ぶし・野ぶしと言ふ、平安朝中期から見える語には、後世の武士の語原が窺はれるのである。『武士(ブシ)』は実は宛て字で、山・野と云ふ修飾語を省いた迄である。

折口信夫「国文学の発生（第四稿）」

此頃〔平安末期〕になつて目立つて来た、もう一つの浮浪者があつた。諸方の豪族の家々の子弟のうち、総領の土地を貰ふことの出来なかつたもの、乃至は、戦争に負けて土地を奪はれたものなどが、諸国に新しい土地を求めようとして、彷徨した。此が又、前の浮浪団体に混同した。道中の便宜を得る為に、彼等の群に投じたといふやうなことがあつたのだ。後世の「武士」は、実は宛て字である。「ぶし」の語原はこれらの野ぶし・山ぶしにあるらしい。又、前の浮浪者とても、元来が、喰はんが為の毛坊主商売なのであつて見れば、利を見て、商売替へをするには、何の躊躇もなかつた。

折口信夫「ごろつきの話」

- ⊙ 武士は「ゴロツキ」から生まれた、「巡遊団体」の一種。うかれ人・ほかひ人。
- ⊙ たんなる罪障論ではない。流人にして神聖な（＝いかがわしい）存在。経済論が背景にある。
- ⊙ 彼らが、ひとの忌み嫌う仕事＝殺生＝戦争に対応（否応無しに儒仏の道徳を超える存在とならざるをえない……武士道の形成）。

IX-4 元武士のゆくえ

■ 失われる武士のアイデンティティ

戸川残花（文士・元彰義隊員）「明智光秀」1893年

支那伝統の道德論、封建政治の忠義論、これらが皆な真理の標準ならんには光秀は逆賊なり乱臣なり不忠なり凶漢なり。封建政治の下に行なはれたる忠義は理もなく非もなく一旦の約束により其君主の所業の邪正を問はず、其身其一族其一門を挙げて釜中の魚となし籠下の烟と為す可き教なればなり。封建政治の世には人に権なく天に父なき時なればなり。光秀をして明治の世に生れしめなば、渠が本能寺の一挙は正当防御と云ふも敢て過言に非ざる可し。

- 残花の光秀への同情は厚い。忠君愛国と並ぶ武士の柱である下剋上を実践に移した光秀は、当然、封建の道德には反したが、明治のいまなら革命といえただろう。

Cf. 明智光秀の辞世

心しらぬ人はなにともしはゞいへ身をもをしまじ名をもをしまじ

順逆無二門、大道徹心源、五十五年夢、覚来帰一元

- 自分の心を知らぬ他人はなんとでもいうがいい。身も名も惜しくない、と光秀はいい、道に順逆はなく、心に徹したまで、五十五年の夢は覚めて元の場所に帰るだけだ、ともいう。
- 残花は慶喜に封建的な忠義を尽くして逆臣となって武士の位を失い、いまは自称文士として、若い藤村や花袋の世話をしている。順逆は光秀と正反対である。だが心は同じだと、残花はいいたい。
- 歴史の順逆を知る者はどこにもいない。

■ アジア主義の誕生（武士＝流民論）

- ◎ 「野に伏し山に伏す位は常住の事……」（頭山満、福岡藩）
- ◎ 土地もなく、売るものとおのれの身体以外にはもたぬ元武士がなお、《武士道》にその根拠を見いだしたとしても、それはけっしておかしなことではない。
 - ただし、それは折口信夫のいう傾き者たちの「ごろつき道德」。〈暴力によって語る〉道德。「腕力の権」（宮崎滔天、熊本藩）。

民権の伸張大に可し、然れども徒に、民権を説いて、国権の消長を顧みる無くんば、以て国辱を如何せん、宜しく日東帝国の元気を維持せんと欲せば、軍国主義に依らざる可らずとし、国権大に張らざる可らずとし、遂に曩の民権論を捨つる弊履の如くなりしなり。

『玄洋社社史』

- ◎ 日本に居場所を失った彼らは《アジア》に目を向ける。
- ◎ 民権主義者にして国権主義者であり、いわば国民国家主義者。アジア中に国民国家を作るべく、彼らは戦う。日本はその尖兵、という位置付け。

Cf. 日韓併合における大陸浪人の敗北（黒龍会の内田良平（福岡藩）・一進会の李容九とが対等の日韓合邦を試みるも、失敗に終わる。国内では大逆事件で、国外においては日韓併合で、元武士たちは敗北する）。